

【特集】現場におけるイメージ認知研究の展開—研究室と生活をつなぐ— —現代行動科学会第39回大会テーマセッションから—

テーマセッション

「現場におけるイメージ認知研究の展開—研究室と生活をつなぐ」の趣旨と成果

司会 遠藤麻友美（岩手大学保健管理センター）

1. テーマセッション趣旨と話題提供者・指定討論者の紹介

認知心理学とは、知覚や記憶といった心の動きを研究する基礎心理学のひとつであると同時に、最先端の科学とも深く関わり、常に新しい知見を模索し続ける心理学の一領域であると言える。今回のテーマセッションは、松岡和生学会長が令和3年度をもって岩手大学を退官されるという機会もあり、松岡会長と所縁のある方々にお集まりいただいた。4名の話題提供者は、認知心理学的な枠の中で各々の興味関心について研究したという共通の経験をもつ。各々の学生時代の研究を振り返りつつ、現在のお仕事や生活といったご自身の現状とのつながりについてお話しいただいた。

沼野芳樹さんは学生時代に錯視や直感像について研究され、現在は大日本印刷株式会社にてメタバースにも関わる最先端の事業に取り組まれている。藤澤佳充さんは心的イメージや Inner Speech に関する研究をされ、現在は写真館、フジサワスタジオを経営されている。小田島彩さんは万人に共通する「〇〇しやすさ」の研究を重ね、現在は独立行政法人労働者安全機構にて多職種の関わる労災病院事業に携わっておられる。森川未歩子さんは視覚イメージと脳活動について研究され、現在は独立行政法人自動車事故対策機構で交通事故防止のための取り組みを行われている。

セッションの最後には、行動科学を社会の中で役立てる実践の場での豊富な経験をもつ株式会社オーグス総研の矢島彩子さん、そして岩手大学松岡和生教授に論点を指摘いただいた。

2. セッションの概要

関わる業界も職種も異なる4名の話題提供者であったが、改めて振り返っていただくと、認知心理学的な視座が日々の仕事や生活に関わっていることが共通点として浮かびあがった。また、それぞれの過去の研究テーマへの関心が現状に結びついているように、イメージ認知研究という大きな流れの中でも、積み上げられてきたあらゆる知見が最新の研究、そして更にこの先の研究活動にもつながっていくことが感じられた。

指定討論では、私たちの生涯において、退化していくものと捉えられている認知やイメージ能力の「発達の可能性」について話し合われた。仮想空間の中で複数のアイデンティティを使いこなす社会が身近になったとき、私たちの心的イメージは、〇〇しやすさは、脳の活動は、どのように変化するのだろうか。高齢化をポジティブなものにし得るイメージの力について、今後の研究が楽しみになるセッションとなった。

松岡先生には、岩手大学でのご指導の他、現代行動科学会をリードしてくださり感謝しております。今後も研究活動の傍らでご指導いただけることを願っております。ありがとうございました。